規範意識を育てるためのカリキュラム開発

所属校：国分寺市立第一小学校
氏　名：宇　野　賢　悟
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：規範意識・カリキュラム開発・道徳・学級活動

Ⅰ　研究の目的

近年、規範意識の衰退が叫ばれてきている。社会生活を営む上での基本的なきまりやルールが守られなくなっている。学校においても、集団行動ができなかったり、学習規律が守られなかったりと、生活指導が困難になってきている。

こういった最低限守るべき、きまりやルールとしての規範意識が崩れている状況をふまえ、教育基本法や学校教育法が改正され、子どもたちの規範意識を育むことが昨今、重要な課題となっている。とりわけ小学校段階における規範意識の育成は、中学校段階やそれ以降の成長にも影響を及ぼす大切な課題であるにもかかわらず、その指導は十分に行われているとは言えない。

そこで、本研究では児童の規範意識の状況を探るとともに、規範意識を育てるためのカリキュラム開発を行うことを目的とする。カリキュラムを開発し、小学校段階で育成する規範意識の指導のあり方を明らかにすることで、児童の規範意識の向上を図ることを目指すものである。

Ⅱ　研究の方法

(1) 規範意識等の概念を明らかにするための文献、先行研究の分析・整理
(2) 規範意識に関する指導について学習指導要領、道徳副読本資料分析
(3) 規範意識に関する指導について学校訪問、聞き取り調査、研究紀要、指導案等の分析･整理
(4) 児童の学校のきまりについての認識度、遵守の程度、発達段階の特性等をアンケート調査
(5) きまり・ルールに関する全体計画作成、６年間の年間指導計画の作成
(6) 道徳の資料作り、検証授業、その整理と分析
(7) 研究全体の成果と課題のまとめ

Ⅲ　研究の結果

(1) 小学校の発達段階で育成する規範意識とは

尾田【2007】によると、子どもの規範意識の確立のために必要なものとして、子どもの発達段階に応じた指導法の工夫を挙げている。小学校段階では、大人の指導によって従ういわば他律から，自分で考え理解した上で、自分からきまりに従う自律へと道徳性の発達をねらうこととしている。

また、ピアジェの発達理論によれば、６歳から９歳までは他律的・絶対的規則と規則を与える権威に対する一方的帰依、または尊敬の段階、10 歳から 12、13 歳までは、自律的・相対的規則を重んずる、相互尊敬すなわち共同の段階としている。

そこで、７歳から 12 歳までの児童期にあたる小学校段階では、他律から自律へ、一方的帰依・尊敬の段階から共同の段階への発達をとげていくことをふまえ、きまりやルール・マナーについて自分で考え理解した上で、規範意識をもって主体的に行動できる道徳性の発達をねらいとすることが重要であると考えた。

(2) 道徳副読本に見られる内容の系統性・発展性

道徳副読本の内容については、学年が上がるにつれて、学校や公園といった身近な場所のきまり・ルールから駅やバス乗り場などのきまり・ルールとより公共性の高いものへ変化している。

また、きまりは守らなければならないものといった内容から自分から意識して行動していくマナーや、きまりとは何かといった問いを考えさせるものへと変化している。つまり、他律から自律へと道徳副読本の資料の内容が (1) で述べたそれぞれの発達段階の理論と一致したものになっている。

(3) 学校訪問調査で見えてきた規範意識を育てるための指導のポイント

聞き取り調査において学校長や道徳推進教師が強調していた規範意識を育てるためのポイント

① 学習の基盤である学級経営の充実
② 生活指導で忍耐強く繰り返し指導
③ 家庭や地域との連携を図り、社会全体で育成
④ 道徳教育での思いやりの心の育成
⑤ きめ細やかな指導、全教職員の一貫した指導

以上から道徳と特別活動を中心に、各教科、学校生活、家庭地域との連携に視点をあてたカリキュラム作成を行い、組織として一貫した指導を行ってい

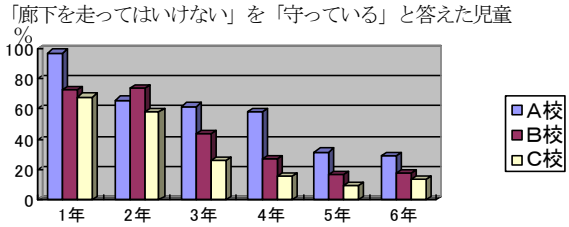
くことで、規範意識の育成が図られると考えた。

(4) 児童へのアンケートに見られる規範意識の傾向

アンケート調査（３校１年～６年児童 731 名）

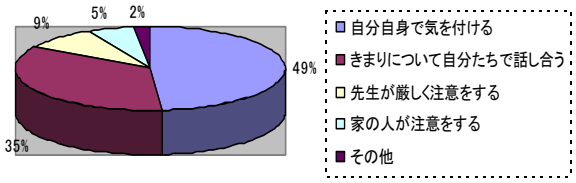
〈アンケート結果〉

「廊下を走ってはいけない」を「守っている」と答えた児童



上記のグラフに見られるように中学年に入る段階から、きまりやルールを守るといった規範意識が崩れ始めていることが分かった。このことからも特に中学年あたりからの規範意識の指導をしっかり行っていく必要があると考えた。

「みんながきまりを守るにはどうしたらいいか」の回答



上記の結果から自分たちできまりやルールを話し合って作る活動を行うことできまりやルールが主体的に守られるのではないかと考えた。

(5) 規範意識を育てるためのきまり・ルールに関する指導の全体計画・６年間の年間指導計画の作成

以上の (1)～(4) をふまえ、規範意識を発達段階に応じて育成するために、きまり・ルールに関する指導の全体計画を作成し、１年生から６年生までの年間指導計画を作成した。その中で、規範意識育成のポイントは以下の通りである。

① 低中高学年の指導のねらいを明確化

規範意識を発達段階に応じて育成していくため低中高学年における指導のねらいを明確にした。例えば、１、２年生では自分からきまりを守っていく意識が低いため、この段階からきまりを自分で守っていくことの大切さをねらいとした。このように、低学年からの指導の積み上げを行うことで規範意識の育成が図れるだろうと考えた。

② 道徳と学級活動の関連を中心に各教科、学校行事、学校生活、家庭地域との連携を重視した指導

道徳で価値意識を高め、学級活動できまりやルールを作る活動を行うことで、より、きまりやルールを自分にとって身近なものであるととらえ、主体的な行動をしていくだろうと考えた。特に３、４年生では、規範意識が崩れ始める時期であるため、道徳の時間と学級活動との関連をより図っていくなど、きまり・ルールに関する指導を重点的に行っていくようにした。また、５、６年生では、きまりを守る意味は十分に分かっているが、行動が伴っていない。委員会等で、きまりやルールを作る活動を奨励し、主体的にきまりを守っていくように指導した。

③ 道徳授業での自作資料の作成

きまりやルールを守る大切さを知るだけでなく、きまりやルールを作ることの大切さや自分たちで考えて行動していくことの大切さに価値意識をもてるような自作資料を作成する。

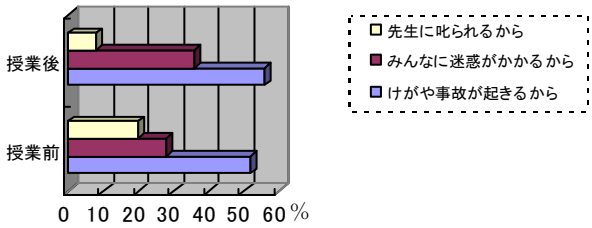
④ 学級活動における指導の工夫

主体的にきまりやルールを守っていく行動力を付けるために、きまりやルールについて話し合う機会を１年生の段階から行っていくようにする。

(7) 道徳授業実施後の規範意識の変化

作成した自作資料の活用も含めて、所属校において３回の道徳授業を実施し、アンケート調査を行った。

「きまりを守る理由」についての回答



きまりを守る理由について児童の規範意識に変化が見られた。これは、自分たちで考えて行動していくことに価値意識をもてるようになった結果であると思われる。

Ⅳ 考察

文献研究、道徳副読本の分析、学校訪問での聞き取り調査、アンケート調査から児童の規範意識の実態と規範意識育成のための指導のポイントが分かり、それをもとに道徳の資料を作成し、授業を行った。道徳の授業後の意識調査からも分かるように、計画的に指導を積み上げると、児童の意識にも変容が見られることが分かった。このことは、１年から６年までのカリキュラムの有効性が期待できるものと考える。今回は学級活動との関連を図ったものはできなかったが、関連を図ることで子どもたちの規範意識をより一層高めていきたいと考える。